

北田耕也先生の足跡 - 「自己形成」の歩みにふれて-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学社会教育主事課程 公開日: 2020-07-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三上, 昭彦 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20976

北田耕也先生の足跡 —「自己形成」の歩みにふれて—

三上 昭彦

はじめに一衝撃的な最期

衝撃的な一報であった。「北田先生が自宅の火災により亡くなられた。詳細は不明」という知人からの訃報に接したのは、3月17日(日)の朝のことであったと思う。半信半疑のまま多少とも委細を知りたいと思い、先生の地元紙である埼玉新聞デジタル版(2019年3月17日付)を検索してみた。下記のような記事が目に入った。辛いことだが先生の壮絶で孤独な最期を記憶に止めておくために、手元にある記事のコピーの全文を引いておこう。

「住宅全焼、焼け跡から1人の遺体 連絡が取れない住民か 近所の住民が煙を発見し通報／小川」とのゴシックの見出しに続き、「16日午後5時5分ごろ、小川町大塚、職業不詳、北田耕也さん(90)方から出火、木造2階建て住宅を全焼した。焼け跡から1人の遺体が見つかった。出火後、北田さんと連絡が取れないことから、小川署は北田さんとみて身元を確認している。北田さんの妻(84)が煙を吸い、気道熱傷の疑いで救急搬送されたが、命に別条はないという。

同署によると、北田さんは妻と2人暮らし、近所の住民が同方2階から煙が出ているのを発見し、119番した。出火当時、妻は買い物に出掛け、北田さんが在宅していた。帰宅した妻が、煙の出ている自宅に入り負傷した。同署で出火原因を調べている。」

昨年8月初旬に明治大学(リバティータワー23階)で行われた「偲ぶ会」でのご遺

族の話では、「消防の現場検証でも出火原因は確定できなかったようだが、もっとも有力な原因と考えられることは、住宅壁内の配線からの漏電であるとのこと。これは定期点検などでも予見しにくいもので、火の回りも早い」とのことであった。先生は出火時にどうされていたのだろうか。体調不良で床に伏していたのか。仕事疲れで仮眠をとっていたのか。早めの晩酌で酩酊していたのか。次の著書の準備に向けて資料の整理に没頭していたのか。真相は不明だが、異常に気づいたときにはすでに遅く、猛煙猛火に倒れたということであろう。無念である…。

先生との親しいお付き合いの始まりは、1975年4月に先生が明治大学文学部に赴任されてこられてからである。私は2年前の73年4月に、教職課程担当の文学部の専任講師として一足先に在職していた。以来、先生の定年退職(70歳)までの24年間にわたり、深く信頼し敬愛する職場の同僚として、また教育研究の先学として、さらに人生の先達としてご一緒し、公私にわたってさまざまな教えと励ましをいただいた。

「偲ぶ会」の際に、先生の「追悼集」出版の企画が呼びかけられた。その後、「追悼集」編集委員会から、先生の「略年譜」作成の協力要請を受けて多少の作業を試みた。先生は生前、自らの履歴や足跡についてはあまり語らなかった。残された確かな資料が少なく作業は容易ではなかった。ここでは大学入学以降の北田先生の「自己形成」の断面のいくつかにふれてみたい。先生の最初の単著は『日

本国民の自己形成』(1971年、国土社新書)である。作品自体は小さな論文集であるが、この壮大な魅力的なタイトルはその後のライフワークとなるテーマそのものであるように思われる。また、私にとって興味深いことは、先生自身が教育学徒としてどのように「自己形成」されたのかという問題である。

東大教育学部入学と社会教育コース・農村実態調査

先生は、1928年4月2日、福岡県小倉市(現北九州市小倉区)に生まれた。戸籍上は北田大音(養父)とキクノの長男和男である。複雑な幼少年期をへて上京し、旧制攻玉社中学(私立)を卒業(1945年3月)、敗戦の直前となるその年の4月に旧制佐賀高等学校(官立)に入学する。ほどなく中退を余儀なくされ、再び上京し旧制武蔵高等学校(私立)に転入し卒業した。1951年4月に新制東京大学(1949年4月発足)に新設された教育学部の一期生として入学した。教育学部を選んだ理由は判然としない。

占領下でのドラスティックな民主的教育改革のさなかにあり、学校制度も旧制から新制への移行期であった。1期生の中には先生のような旧制高等学校卒業生とともに、新制の東京大学教養学部(駒場)からの進学生が混在していた。当時の教育学部関係者の回想がある。「1951年(昭和26)4月12日、雨のなかを教育学部第1回の学生の進入学式が行われた。教養学部からの進学者はごくすくなく、多くはいわゆる白線浪人組の旧制高校からの入学者で、併せて56名であった」(確井正久「教育学部30年の回想」『東京大学教育学部30年記念誌』1982年3月、同学部発行。なお筆者は教育心理学科の助手であった)。

新設当時の教育学部(定員60名)には、教育学科(定員10名)、教育心理学科(同前)、学校教育学科(同前)、教育行政学科(20名)、体育学科(10名)の5学科が設置されていた。教育行政学科は「教育行政を主とするもの」と「社会教育を主とするもの」に二分されていた(後に「コース」と改称)。もっとも1期生を迎える51年度だけは、各学科・コースごとの定員は定めなかったこともあり、進入学者の過半数の34名が教育行政学科に集中していた(前掲『教育学部30年記念誌』)。先生は教育行政学科の「社会教育を主とするもの」(社会教育コース)に入学している。

発足直後のことでもあり教員スタッフはなお未整備であった。旧制帝大の文学部(教育学科)から移籍した岡部弥太郎(教授)、海後宗臣(同)らの他、勝田守一(同)、牧野巽(同)、宗像誠也(同)、大田堯(助教授)、三木安正(同)、宮原誠一(同)など10名ほどであった。教育行政学科担当は宗像(教育行政)、宮原(社会教育)のわずか2名のみである。しかも時あたかも朝鮮戦争の勃発、対日講和条約・日米安保条約の締結をめぐる世論が対立し、メーデー事件などデモ隊と警官隊の激突、共産党や社会党の分裂、労働運動や学生運動の分裂など、国内外、学内外の事態は騒然としていた時代であった。こうした状況のなかで教育学部の教育・研究はどのように行われたのであろうか。学生たちはどのような大学生活を送っていたのだろうか(その一端は前掲の確井「回想」にある)。

前掲『教育学部30年記念誌』には、卒業論文の一覧が掲載されている。北田和男「農村の政治意識—群馬県島村における実態調査報告」とある。因みに同期の社会教育コースの1953年度卒論提出者一覧(20名)には、岡本包治、神山順一、木下春雄、岸本弘、廣畑一雄、村田泰彦らの名とその卒論タイトルが並んでいる(翌年度の卒論一覧には、酒匂一雄、千野陽一らの名もある)。北田卒論の他にも、同じ群馬県島村の農村調査を踏まえた数件の卒論があることからみると、宮原先生の指導下で総合的な農村実態調査が行われていたことが推察される。

これらの同期生の多くとはその後も親交が続き、先生が後に東洋大学、明治大学に職を

これら

得る上で少なからぬ支援を受けることになったのである。

国土社入社と月刊『教育』の編集実務担当―「教科研大学院」の時代

1954年3月大学卒業後、大学院には進学せず教育関係などを主に手がけていた国土社に入社する。編集部の一員として同社から出版されていた月刊誌『教育』（教育科学研究全国連絡協議会の機関誌）の編集実務に5年間専念することになる。大手マスメディアへの就職をめざしたがかなわず、卒論指導教官でもあった宮原先生の薦めにより5年の約束で入社したと耳にしたことがある。

当時の教科研（全国連絡協）の常任委員や編集長・編集委員には、勝田守一、宮原誠一、宗像誠也、五十嵐颯、古川原、大田堯、大槻健、小川利夫などがおり、全国各地の教育現場では多くの優れた教育実践者が活躍していた。この間の同誌の編集長は勝田守一（初代）、古川原（第二代）、五十嵐颯（第三代）の3名であった。編集実務担当者は二人体制であり、他の一人は大学同期生の廣畑一雄のほか、高橋（石川）隆三郎、斎藤健一が順次担当した。電話がまだ普及していない時代であり、原稿の依頼、催促、受け取りなどすべて筆者宅を訪ねて廻る日々であったようだ。かなりの激務であったことは間違いないだろう。

しかし、その5年間は先生にとっての「大学院」時代であったのではないと思われる。戦後民主教育の研究と実践を牽引した錚々たる多くの先生方と親しく接し、その原稿を読み話を聞き、編集会議や研究会などの論議をとおして、子どもと教育の現実を踏まえた「教育の理論と実践」を学んでいたと思われるからである。当時の「教科研大学院ゼミ」の様子を活写した興味深い一文がある。やや長文であるが引いておこう。

事務局員たちも、勉強をはじめました。…事務局員のサークルを作ったわけです。毎

月第一金曜は本誌の編集会議、第三金曜は事務局会議ですから、そのほかの金曜日の夜を勉強会にしたわけです。主唱者は五十嵐（颯）さん、今は宗像編『教育科学』、海後編『教育科学』、矢川著『国民教育学』を並行して読んでいます。

勝田（守一）さんは金曜の午後は教養学部で何百人の学生を相手の講義があるので、いつも疲れ切って出てきます。はじめのうちは口をきくのもいやそうですが、一時間もすると元気になってしゃべりはじめます。大槻（健）事務局長ははじめのうちはだまってノートをとっていますが、そのうちに鎌首をもちあげて重い口をひらきます。大槻さんがノートをとる事を忘れるようになると一座はたのしくなります。

五十嵐さんが独得のたくまざるユーモアでびしびしと論じます。居眠りをしてたのかと思った山内（太郎）さんが鋭い論陣をはります。小川（利夫）さんが大きな目を光らせます。編集部の斎藤ケン（健一）ちゃんが口をとがらせます。北田（耕也）君が皮肉なほほえみを浮かべます（『教育』72号・1957年5月号「編集後記」、執筆者の「F」は第二代古川（原）編集長である。なお、氏名の「名」部分は引用者による）。

東洋大学への赴任と『教育』編集長―研究者としての自立

1959年4月、当初の約束どおり5年間の国土社員として『教育』編集実務担当の勤務を終えた後、先生は東洋大学に新設された社会学部（応用社会学科・マスコミ専攻コース）の専任講師の職を得て、本格的な研究者としての生活をスタートさせる。しかし、その16年間は忸怩たるものがあつたようである。以下のような先生自身の一文が残されている。

大学で社会教育を専攻した私が、東洋大学では社会学部に属し、マスコミ専攻コー

スの専任講師という教師生活の発足は、どうみても無理があった。無理を承知で破格の扱いをして下さったのは、社会学部新設の準備をしておられた故・米林富男先生である。

米林先生に引き合わせてくれたのは、大学時代の同級生で当時東洋大文学部にいた岡本包治氏であった。その頃、先生にはマスコミ事典をつくらうというお考えがあった。私は大学卒業後しばらく出版社勤めをしていたから、何かの役に立つかも知れないという岡本氏の推薦であった。・・・私はマスコミ研究に何の業績もあったわけではないのに、あえて採って下さったのは、それまでの雑誌編集の経験を研究に生かせばよいという寛大なお考えからではなかったか。・・・研究者としての私は、米林先生の御恩に報いることはできずに終わった。教育者としての自分も、「大学紛争」時代の言動の未熟さばかりが思い返される」（北田『談論始末』1998年、私家版の「あとがき」）。

この書物の奥付には、「発行・制作 北田先生の古稀と退職を祝う会」とある。それは東洋大学社会学部時代の教え子有志による会である。「教え子有志」によるこうした“粋な計らい”は、東洋大学時代の先生の学生に寄り添った教育と活動の証以外のなにもでもなかろうと思う。

この時期、学外では教育科学研究会（教科研）を中心に精力的な活動に取り組んでいる。1962年の夏に教科研は、それまでの各地のサークル加盟であった教育科学研究全国連絡協議会から、個人加盟の教育科学研究会に組織の大改編を行った。委員長は勝田守一、事務局長は大槻健が留任しているが、教科研運営の中軸である常任委員会、（全国）委員会、編集委員会のメンバーは大幅に若返っている。戦後第二世代が前面に登場した教科研の第二期である。常任委員会、編集委員会のメ

ンバーは首都圏在住・在勤者にならざるを得ないが、佐々木享、柴田義松、中内敏夫、堀尾輝久、正木健雄、山住正己らの中堅研究者の名が並んでいる。先生も常任委員、編集委員に選任され、1963年秋から1年間余は『教育』第六代編集長も務められたのである。

明治大学への転任と充実した研究生活

1975年4月、先生は16年在職した東洋大学社会学部から明治大学文学部に移られた。その年から明治大学では、教職課程、学芸員養成課程に次ぐ三番目の資格課程として、社会教育主事養成課程（以下、社教主事課程）が新設されることになり、先生はその主任教授に乞われ移ってこられたのである。私がいた当時の教職課程には6名の専任スタッフがいたが、新設の社教主事課程は主任である先生のみであった。ようやく2名体制になるのはそれから15年後のことである（1990年4月に小林繁さんが専任講師として赴任された）。

明治大学では資格課程教員は各学部やキャンパスに分属せず、すべて文学部に所属していた。しかし全学（当時、7学部1短大と大学院）の履修学生の授業（講義や実習）を一手に担当していたことから、資格課程の授業はさまざまな学部・大学院の学生が受講していた。研究室は大学本部のある駿河台に在ったが、駿河台（千代田区）、和泉（杉並区）、生田（川崎市）の三つのキャンパスに置かれた授業に出講していた。また、駿河台地区には文系学部のいくつかの夜間部（二部）が設置されており、夜間部3限の授業は夜10時に終了していた。

私の担当していた教職課程では、ピーク時期には全学で3000名を超える履修者がおり、「教育原理」などの必修科目は、300名超の階段教室でのマスプロ授業もめずらしくなく、学年末の学生の答案やレポートは1000枚を超えることも数年間続いたものである。4年時に課されている必修科目である教育実習（2週間）は、実習に行く学生への事前指

導や実習校（中学・高校）での「研究授業」の参観指導などがあり、非常に難儀なものであった。それに比べると社教主事課程の履修学生ははるかに小規模であり、実習も未だ必修化されていなかったことから、先生の心身の負担はさほどではなかったかと思う。とは言え小なりとはいえ新設課程を一人で長年にわたり切り盛りされ、その充実に尽力されたご苦労は決して少なくなかったであろう。

先生の「著作等目録」を目にしてあらためて気が付いたことは、高評を得た主著『大衆文化を超えて一民衆文化の創造と社会教育』をはじめ、『現代文化と社会教育』、『感情と教育—教育に希望を求めて』、『自己という課題』、『明治社会教育思想研究』、『近代日本少年少女感情史考—けなげさの系譜』などその主要な著作は、明治大学在職時代に執筆され上梓されていることである。先生の明治大学在職時期の学内環境や学内行政は、最後の数年間を除いては教育・研究にとっても決して良好なものとは言えなかったが、総じて明治大学での20余年は、研究生活としては充実したものであったと思われる。

私たちはそれらの著書をその都度頂戴した。鮮やかな朱の花押のある葉が添えられていることが多かった。いずれの作品も深い思索に貫かれたものである。文章は考え抜かれ推敲を重ねられた名文である。文章だけではない。それぞれの著作のタイトルや各章・各節の見出しもまことに魅力的なものが多い。

おわりに一二つの「本名」と二つの「筆名」—

「知る人ぞ知る」であろうか。先生には二つの本名（北田和男と北田耕也）と二つの筆名（北田耕也と大音寺一雄）があった。上記のとおり出生時の戸籍名は「北田和男」であり、大

学の卒業論文にもその名が記されている。

国土社に入社してから一貫して使用された通称・筆名が「耕也」である。『教育』（1955年5月号）の「編集後記」には、勝田編集長により「編集実務担当者」として「北田耕也」の名が紹介されている。おそらくそれが「初出」と思われる。その後に発表された論稿や著書はすべて「耕也」である。そうした「実績」をふまえて、「和男」から「耕也」への改名が正式に家庭裁判所により認可されたのは、明治大学に赴任する直前であった（1975年3月）。「大音寺一雄」は明治大学退職後に上梓された3冊の「自伝的小説」の著者名であり、二つ目の筆名である。最初の筆名である「北田耕也」と比べると、「大音寺一雄」はいささか先生らしからぬ「命名」ではないかと思ってきた。しかし、「大音」は僧職にあった養父の名であり、「一雄」は自らの当初の戸籍名「和男」に通じることを考えると、考え抜かれた上での「命名」であったとも言える。

訃報に接してから3週間ほどたって、大音寺一雄『姉弟私記』という小さな美しい装幀の書物が突然届いた。「謹呈 著者」の葉が付されていたことから、何か不思議な感覚と驚きを覚えつつ、一気に読んだ。「姉弟二代」（著者と姉、著者の娘と息子）をテーマとした「自伝小説」風の作品であった。非運のなかで早逝した姉への沈痛な想いと情愛、娘と息子に対する深い慈愛が織りなされ、読者の琴線にふれるものであった。先生の出自は決して幸せなものではなく、その最期は想いも寄らない酷いものであったが、人生を締めくくることになった本書は、私にとっては人間北田耕也の「生き様と美学」を感じさせるものでもあった。<2020.1.13記>

（明治大学文学部元教員／教職課程）